

北海道 3月号 かわばたの風

4月の予定

5日 工賃支給日

19日 避難訓練

23日 工賃会議

東日本大震災から10年が経ちました

管理者 太田 さとみ

震災後10年が過ぎましたが、未だに余震で「グラツ」と揺れると、嫌が応でも震災時を思い出します。愛篤福祉会が北海道に事業所を構えたのは、原発からの避難が目的でした。10年経った現在でも、原発の終息はまだまだ未知数です。先日の余震後に、ある障がい者施設の方から、「愛篤福祉会の方たちは良かったね、川端にこの施設があつて。避難できる場所は福島の人達にとつて必要だね」としみじみ話をされました。強い揺れが福島で起こると、事業所に携わつてくださる方々が心配して連絡をくれます。北海道が揺れなくとも、我が身のように心配してくれる環境があります。法人は先駆けて避難所を設け、障がい者が困らないように安心を提供してくれました。原発からの避難なので、北海道のように遠くて当たり前ですよね。私達は、これから先も障がい者が困らない支援体制や施設作りを目指します。全員に寄り添い、互いに【みんなが幸せ】のステージに沿って進めてまいります。

サービス管理責任者 加藤 安子

北海道に移住し、胆振東部地震の震度5弱（平成30年9月）を体験した際、災害はいつ、どこで起きてもおかしくないと思改めて思いました。しかし、近所の方々が心配して事業所に来てくれた時、「この地質は砂礫（砂と小石）質台地で、地震に強く液状化しにくい地盤だから災害の被害は今まではほとんど受けていない」、「学校の運動会の前日に大雨が降つても、水はけが良いから中止せず」に開催された」等のお話を聞き、なんとなくほっとしたことを思い出します。川端の生活では、近所の方々からのさりげない心遣いに元気を頂いたことが多々あります。こちらのお礼の言葉には、北海道の方言「なんもなんも」と返ってきます。「大丈夫だよ」「いいから気にしないで」等にあたりますが、人を思いやる方言の響きに、心身ともに癒されています。

支援員 鈴木 朋美

この文章を書くにあたり記憶を呼び起こそうとすると、以前より記憶が曖昧になっているところが多くなったと思いました。それでも、いわき市からヨウ素剤を配布された時に感じた不安と恐怖だけは、今でもはつきりと覚えています。3・11の津波で函館の方が1人死亡していたことをニュースで最近知りました。北海道は被害が無かっただろうという誤った先入観で地震の話をした時、変な温度差の様なものを感じていましたが、痛みを伴ったのは私達だけではなかったのだと思に至り無知を反省しました。KAKA'sはまだまだ発売途上です。原発事故や、有事の際には皆になる場所です。「KAKA'sがあるから安心できる」と思っていただけのように、頑張っていきたいと思えます。

風だより

春彼岸頃、夕張川の上空で渡り鳥の北帰行が始まりました。雪から雨に変わると辺りは「春」の空気に包まれます。閉ざされた空間から一気に解放された感覚が湧き起こりますが、「コロナ禍」であることの危機感を忘れないように。最近では、「変異株」も流行り始めています。緊急事態宣言が解除になりましたが、解放された感覚はしばらく封印し、窮屈ですが手洗い、マスク、除菌、ソーシャルディスタンスを守りましょう。身を守るためです。

ゆき ふ がいしゆつ で き
雪が降り外出がなかなか出来ないので、
 しつない うんどう
室内で運動をたくさんしています♪



**ひなんくんれん
 避難訓練**

ひがしにほんだいしんさい
 東日本大震災から 10年が経ちます。あの時の震災で怖い思いをした経験があるからこそ、
 ひなんくんれん ちから はい
 避難訓練にも力が入ります。



しゃべらない



もどらない



かけない



おさない

